

季刊 連句 第39号

平成四年十二月一日発行



ぬらりひょん (南柏雑記 37) 1
 英語と日本語での連句体験 矢崎 藍 ... 2
 — AIRでの半歌仙「アンにささげるビーバーの巻」 —

第十二回 俳諧芭蕉忌 第四十三回 猫蓑会 6
 正式俳諧興行 脇起り二十韻 冬籠り 捌・文 豊田好敏
 二十韻八巻 捌・文 東 明雅 金久保淑子 蒲原志げ子 雑賀 遊
 八角澄子 百武冬乃 山口みづゑ 山崎一恵

「灰汁桶の」の巻 鑑賞 (I) 東 明雅 ... 16
 「馬追」付勝練習二十韻 東 明雅 ... 20

新庄市第四回全国連句大会 文・上月淳子 ... 22
 作品 三巻 捌 豊田好敏 内田麻子 中島啓世

芦丈翁俳諧聞書 (VI) 24
 百韻 膝送り 醉芙蓉 花の会 ... 26
 二十韻 四巻 捌 藤井草舎 瀧川雅代 鈴木美奈子 ... 28
 東 明雅 19
 新刊紹介 27
 雁帛往来 29

ぬらりひよん

南柏雜記 37

雅

「あるものは付く、ないものは付かぬ」これは先師芦文翁の遺訓である。とすれば、常識では此の世に存在せぬと思われる、妖怪・魑魅魍魎の類いを付けるのは、教えに背くことなるうか。

A しがない暮らし屋台引き引き

お母さんあれは人魚が泣くのです

B 胸元に袖を合はせる秋裕

眉ぬれぬれと蛇身隠して

などに見られる人魚の句、蛇女の句はあつてはならぬ句であろうか。私はそうは思わない。人魚の話、そして蛇女の話、それは幼い時から、いろいろ聞かされて既に私どもの頭の中にしみこんでいる。即ち、頭の中には存在するのである。たとえば、同じ妖怪の中でも、歳時記に登載され、公認されている雪女（晩冬）あるいは河童（晩夏）との差はいかがであるう。雪女や河童が詠んでよければ、人魚や蛇女が出せぬという筈はない。問題はその出し方にあると言つてよい。

C 潮騒の浜辺を照らす寒の月

白絹かぶり雪女めく

仰

石雀

きよみ

同

青き瞳の野性の恋は奔放に

D 裸木を抜けて佇む雪女郎

しばれる閨の熱きくちづけ

のっぺらぼう・ろくろくくび・猫又・ざしきわらし・やまんば・うぶめ・一つ目小僧・つちのこ・天狗・海坊主・屋幽霊・背後霊など、私が用いた妖怪は多いけれども、それらは珍らしいことに価値があり、度々出すとまたかと言つて、捌き手から採用されないことが多い。

その点、次の句はいかがであるうか。

E ねずみもち黒き実垂れて御師の家

ぬらりひよん出る蕪村忌の宵

愁ひつとおもきおるどの抱きごろ

ここに出る「ぬらりひよん」については、私も正確な知識はなかった。最近出版された水木しげる氏の「妖怪画談」（岩波新書）を見ると、次のような説明がある。「夕方、人々がせわしくしているときに、どこからともなくやって来ては、勝手に家の中にあがりこむ、そして座敷でお茶など飲んだりする」。商人のような恰好をしてとにかくぬらりくらりとした妖怪らしい。

お陰でよく分かったが、それにしても、この「ぬらりひよん」の句を取り上げて下さった捌きの下坂元子さんに感謝するとともに、この句から、次の奇想天外なおもしろい恋の句を作られた秋元正江さんに敬意を表するものである。

秋景

孝子

隆秀

遊

明雅

正江

英語と日本語での連句体験

— AIRでの半歌仙「アンにささげるビーバーの巻」 —

矢崎 藍

国際連句協会（AIR・近藤クリスマス会長）の北米連句ツアーにこの夏参加しました。

カーメルからサンフランシスコ、サンタフェ、ミルウォーキー、ニューヨークと一ヶ月もの長旅。英会話が苦手な私ですがリーダーの近藤蕉肝・クリスマス夫妻の通訳により、連句のイトコをたくさん作ることができました。

とはいえ現実には英語圏の中でどう連句が進行するのか、月なかばのミルウォーキーでクリスマスさんに「アイ、リーダーよ」といわれ、初めて捌をした巻をご紹介しようと思いません。

*恥をかいて三句の転じ説明
ミルウォーキーでの連句の会場はウッドランドパターン。芸術文化関係の専門的な本を中心に置く本屋さんですが、奥に集会場があります。経営者のカール・アン夫妻の活動により地域文化を育てる根拠地なのです。

その日も金髪を三つ編みのおさげにしたアンさんが、エプロン姿でお茶の用意や机運びの指示をして忙しく働いていました。二つの連句席の用意ができると姿が消えます。

どここの目的地でもこういう方々にお世話になる私たちで

す。アンさんは今回AIRの全員にTシャツのプレゼントもしています。その日それを着てきた私の胸には、アンさんの筆によるビーバーくんが上着を着て自転車漕いでいます。楽しいでしょう。それで発句。

ビーバーも自転車飛行秋うらら 藍

太い短冊に横書きにします。クリスマスさんが下に英訳を書き、読みあげ、私が胸の絵を指し、たどたどしい説明をして一座開始です。

あ、でもこの日のメンバーが自己紹介しなくてはね。つぎにクリスマスさんが、連句は三句の転じが必要なこと、素材をくりかえさないようにと、式目の説明もしておきます。

「さて、脇だけど秋ね」とクリスマスさんが私に念おし。「何に気を付ける？」「秋の季語をいれる。発句にぴったり付けること」

それしかいわなかったんです。すぐに五枚も出た句をクリスマスさんの解説を聞き、辞書もひいて読み、次の句をもらい日本語訳しました。

2 the swallows are beginning / their distant migration (燕はるかに帰りはじめる) ポブ

「第三も秋を」と言おうとしてギクッとしました。月を入れ忘れてます。しかも発句が飛行で、うららですもの。第三に天相はダメ！ しかたなく発句を直して月をいれます。

藍

1 ビーバーも自転車飛行屋の月
「マイミステイク」といって、クリスさんに理由を言ってもらいます。天相がうち越すことも、素秋にしないために本来五句めの月の座をひきあげることも。こんなややこしそうなルールを彼らは真剣にきいてうなずいています。——かくて恥をさらし、三句の転じの重要性を一座に確認した捌なのでした。

* 難しい季感・生活感

三句目は「また秋。発句が童話的なので離れて生活感を人情 (Person) をいれて、内にはいる (indoor)」と。季語のない句は返します。もつとも「セーターは冬の季語」と返したら「ミルウォーキーではセーターは秋のイメージ」だと反論されました。ミルウォーキーの冬は零下十数度。

ミシガン湖が凍る音がするくらい。セーターで街を歩くのは秋の季感なんですね。この土地の季語集作りが待たれることです。

o Shutting windows / the gardener / arranges dry herbs (菜園のハーブ作りは窓しめて)

× ティー

この句はクリスさんやほかの人の意見でとっています。ハーブ作りは秋の家庭の仕事なんだそうです。生活感のある句を“なんていった私がこの土地の生活感を知らない

のです。

4 (ガレージで子等劇の練習)

ダニー

5 (満開のビーチパラソル湖の岸)

ジーン

6 (蟬がかき消すチェンソーの音)

クリス

夏二句をいれてここまで表六句です。

あ、訳にカタカナが多いのはごかんべん。

それにしても、自 (myself) 他 (others) 場 (place) まで言っているのですが、抵抗はありません。どうも彼らはいま “付け句をしつつ三句の転じをする” という全く新しい文学形式を習おうとしているのです。ダニーさんなどオハイオから泊りがけでこの連日の連句セッションに参加していると聞きました。方法論や知識を、少しでも覚えて身に付けたいというのは当然なのです。

* ハイク・レンクの英語での定型

さて裏にはいって恋もいいですよという気分がほぐれます。

1 (噂の彼大学やめて職に就き)

ダニー

2 (背なのファスナーもつれもどかし)

希久

秋田希久さんは大阪の作詞家さん。連句はこの旅で始めてだそうですが、さすがに色っぽく具体的な恋句です。クリスさんが英訳するともう説明不要で、みんなにここです。

3 (夫が聞く胎児の心音聞しじま)

ボブ

中身の濃い幸せな恋句ですね。ボブさんはハイク歴二十五年。「モダンハイク」という雑誌の編集も長くされていて

ます。ただし、私は自分の訳に不満です。実は英語の句では、

preparing for bed/the husband listens to/the

fetus's heart

つまり夫婦が一日を終えて寝る前の寝室風景なのです。

「聞しじま」より日常的です。

でも「寝る前に」じゃあんまり味気ないし、どなたかど

うぞい訳を教えてください。

4 (じまんのキルト散った布きれ)

レベッカ

5 (月凍り白いバンガローに立つ煙)

ジェフ

6 (廃墟ザグレブ民は埋もれし)

ベティー

7 (残されし嘆きは地蔵のみぞ知る)

ダニー

キルトのやり句から冬の月。そこで時事か歴史をと誘う

と、ザグレブが出たのでした。

ザグレブはスロベニアとクロアチアの争点の街。こんな

民族問題は私たちより身近でしょうね。この移民の国の人

々の多くはファミリーの祖国をヨーロッパに持っています。

作者のベティーさんはダンサーだとか。ハイクをダンス

にしたこともあると話してくれました。さっきのボブさん

もそうでしたが、聞けばこの席の全員ハイク歴があります。

実際私たちのツアーは行く先ざきで、北米の各ハイク協会

にお世話になっています。ハイクから連句への素直な関心

は、日本の連句人には羨しいことです。

ところで希久さんが私の横で囁きました。

「ね、ズルイと思いませんか？ 彼らは三行詩と二行詩で、

一行の長さは自由でしょ。日本人は575と77に合わせ
るんですもの」

こういう率直な感想って大事ですよ。

実はサンフランシスコで私たちはアメリカカナダユーキ

テイケイハイク協会の指導者徳富喜代子さんにお会いしま

した。この協会ではその名のとおり有季定型——つまり英

語のシラブルも57577に合わせるのです。

私は英語のリズム感についてうんぬんできませんけれど、

定型詩としての俳句連句の海外への出方の重要な問題と思

います。

* 雨のキッスの花の句

ファスナーに胎児の心音、ザグレブに地蔵と、印象の強

い句がすでに出たので、あとはさらさらといくところす

ね。

8 (ランプゆらしてボールとまりぬ)

ジェフ

9 (目を閉じて新しいゲーム案じつつ)

ボブ

10 (若緑してもとむやさしさ)

ベティー

やさしい若緑はやさしい花を呼びました。

11 Kiss of rain/blossom time/has come

ダニー

(花やいま雨のキッスにはほけそめ)

ボブ

12 (丸太の上で亀の永き日)

実質的には連句新人ばかりですが、私の好きな感性の句

が出て、幸せな座でした。ただ後から近藤蕉肝さんに見て

もらったら、訳しちがいがありました。ザグレブの句は、

(burned)つまり「焼かれし」なのです。私は(burried)

と間違えたのです。ナンチュウ英語力！それで煙とそのあとの炎と、火が多くなってしまいました。それに、ハーブの句もそうですが、単語の意味をわかるだけでなく、生活感に共感がないと捌の選択が狭くなることは何度も感じました。（これは日本で世代の違う連衆とするときとも似ていますね）

しかも句は意味でとるわけで、英語の詩としてのニュアンスや完成度は全くわかりません。だから私はずいぶんクリスさんの意見をききましたし、ここはクリスさんと二人の捌とするべきだと思います。英語の連句と日本語の連句と仕上がるわけですね。（スペースがないので日本語のほうだけ最後にまとめます）

*

この晩、私たちはアンさんのお家に伺い、おいしいスープと七面鳥をいただきました。

*

壁や棚には木彫りの大リスや少し不気味な人形や、アンさんの作品がいっぱい。いろんな夢が空中飛行していましたよ。そして私たちの旅もまた、連句という不思議な夢を作りつつ、このあと半月も続いたのでです。

東 明雅
杉内 徒司
大畑 健治

連句辞典

東京堂出版
定価 三六〇五円

半歌仙 アンにささげるビーバーの巻

藍・クリス 捌

ビーバーも自転車飛行屋の月

燕はるかに帰りはじめる

菜園のハーブ作りは窓しめて

ガレージで子等劇の練習

満開のビーチパラソル湖の岸

蟬がかき消すチェンソーの音

噂の彼大学やめて職に就き

背なのファスナーもつれもどかし

夫が聞く胎児の心音聞しじま

じまんのキルト散った布きれ

月凍り白いバンガローに立つ煙

廃墟ザグレブ民は埋もれし

残されし嗅きは地蔵のみぞ知る

ランプゆらしてボールとまりぬ

目を閉じて新しいゲーム案じつつ

若緑してもとむやさしき

花やいま雨のキッスにほだけそめ

丸太の上で亀の永き日

一九九二年八月十八日 首尾

於・ウッドランドパターン

藍

ボブ

ベティ

ダニー

ジーン

クリス

ダニー

希久

ボブ

レベッカ

ジェフ

ベティ

ダニー

ジェフ

ボブ

ベティ

ダニー

ボブ

第十二回 俳諧芭蕉忌

第四十三回 猫蓑会

平成四年十月二十一日
於 深川芭蕉記念館

恒例の芭蕉忌を十月二十一日(水) 深川芭蕉記念館で修し、正式俳諧を興行した。その後、二十韻八巻を首尾。参加者四十三名

第一部 正式俳諧興行 「冬籠り」 一巻
第二部 二十韻八巻

(一) 役割

- 宗匠 豊田好敏
- 脇宗匠 副島久美子
- 副宗匠 中田あかり
- 執筆 内田麻子
- 知司 上月淳子
- 副知司 小林千雪
- 座配 梅田利子
- 座見 滝川雅代
- 花司 市野沢弘子
- 香元 原田千町
- 配硯 橘田文子
- 同 久保田庸子
- 同 須田智恵子
- 老長 和田和子

(二) 次第

- 一 席改め
- 二 席入り
- 三 配硯
- 四 献花
- 五 執筆呼び出し
- 六 文台捌き
- 七 俳諧興行
- 八 花前
- 九 献香
- 十 花の句披露
- 十一 端作り
- 十二 吟声
- 十三 文台返し
- 十四 作品奉納
- 十五 納硯
- 十六 挨拶
- 十七 退席

脇起り二十韻冬籠り

捌・文豊田好敏

冬籠りまた寄り添はんこの柱

家内こぞりて祝ふ炬開

海流の運ぶ潮の香松原に

放した犬を追ひかける子等

十一面観音の月覗き見て

らくがき帳に挟む秋桜

初デート甘く酸っぱく林檎剥く

アッシーメッシーそれで本望

大統領訪日つひにとり止めぬ

土曜休みを過ごすあれこれ

鉢巻きも神輿の渡御に急かされて

冷酒ですよと念を押す爺

地滑りの跡荒々と村の山

なれぬ手つきで添へ木つけやる

見つめる眸の中は彼ばかり

閨しんと風疼く月

清張も鬼籍に入りて未完なる

つくしてふ字にくねる白魚

小綬鶏の鳴けば大樹の花照りて

若き父親ゆるするふらここ

芭蕉忌 正式俳諧の宗匠のお役をお受けして

思い起こせば今年四月、明雅先生から「次は宗匠をおねがいしますよ……」と内示をいただき、改めて六月頃お話をいただきました。

宗匠という大役、執筆も脇宗匠も副宗匠の方々も皆さまが大先輩。花司も香元も同じく大先輩で、私が宗匠とは……という思いで、心は千々に乱れました。その時脳裏を走ったのは、かの『去来抄』。発句と乞はば秀拙を選ばず早く出すべき事也。恩師のご命令は一にも二にも早くお返事すべきと思い、「ハイ」とお返事。わが心に思う言い訳として、勸進帳ではないけれど経験浅き役者が義経役を命ぜられたと受け止め、ただただ立ち居振舞に粗相のないように専念すること。

お香を捧げ持つてよるめいたり、ひっくり返ったら一大事と、約一カ月の間、毎朝一時間、つつ正座をし、おもむろに立って歩いたりして、自信をつけ本番も夢中で乗り切ったわけです。

さて、おかげさまで今回の芭蕉忌正式俳諧は、お役の皆さまが、するすると流れるように、典雅な中にも和やかな雰囲気醸しだされ、心から感謝しております。

その、無事終了した喜びが、その後の二十韻のお席で脱線しかかったことは、かえすがえすも不覚のいたすところと深く反省する次第です。

- 翁
- 明雅
- 千町
- 弘子
- 正江
- 利子
- 雅代
- 淳子
- 久美子
- 和子
- 文字
- 千雪
- 庸子
- 豊美
- 智恵
- 淑代
- 健悟
- シズ
- 好敏
- 執筆

秋の風

物言はぬ翁の像や秋の風

新酒の杯にゆるる月影

茸山分け入る程に家ありて

BSアンテナ集ふ村人

嫌煙権もち出し女きらはれる

三つ児の母になって十八

カタカナの料理だけしか出来ないの

ゴビの沙漠に馬頭琴鳴る

虹の橋渡りて黄泉へ立ちしとや

百の石仏祠る夏草

宰相も大統領もゆれる座に

飢と戦ふソマリヤの子等

焚火して徹夜の果の切符買ひ

野球と芝居飯よりも好き

おやちギャルトトカルチョまで手を延ばし

男を変へる季節変りめ

月出でて浜をよこぎる蟹がざみ

白魚売りて身体くたくた

花筵野点の顔の上気して

鶯の音のととのひて行く

惠	蓉	同	道	豊	麻	豊	惠	道	同	麻	蓉	豊	蓉	子	道	子	麻	子	豊	美	子	惠	明	雅
---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---

二十韻「秋の風」の巻、はじめ、一座の顔ぶれがすべて新顔の方ばかりだったので、これはとちよつと不安であったが、ベテランの応援もあり、無事、時間内に首尾することができた。もちろん、新顔と言っても、A・C・Cで半年間修業された実力は無視できないものがあって、たとえば、私の発句に対してすぐ晩秋の月を出されたのは、秋の風というものに対して、第三では天象・氣象の打越になる事、また、三秋に対して季を定める処置を考えての付けであるうが、これは猫蓑会初出場の方の句とは思えないすばらしさである。

第三も、大きく転じて、いかにも丈高い、それで新しみのある四句目が出て、大関ワンカップで乾盃した時は、もう、私はすっかり安心していた。

裏の折立、嫌煙権を持ち出したのは原句では男であったが、連衆一同の添削で女となった。これは次の恋句の誘いというわけであるが、これも妥当だと思ふ。この時私はお酒によっぱらっていて、皆の意見をウンウンと言って付け進んだもので、新しい方々の御意見も実にまっとうで感心した。こうなれば、捌きは楽なものである。ついに十八歳で三つ児の母となったのも、御本人の意志というよりはむしろ連衆一同の作品といった方がよろしい。かくて、一卷はゴビの沙漠に行ったり、ソマリヤの子や、おやちギャルなど、結構、変化に富んだものが出て、楽しかった。

捌・文 東 明 雅

脇起り鷹 一 一 つ

捌・文 金久保 淑子

鷹一つ見付てうれしいらご崎

冬構へすむ家の遠近

深鍋に具をあれこれと煮こむらん

うろ覚えなる歌を英語で

山の端を染めて居待の月上る

露にしめりし肩を抱かれ

忍び合ふ葡萄酒醸す樽の陰

録音機能もてるラジカセ

国政をよそに跡目を争へり

悠悠自適犬のお散歩

やうやくに葵祭の準備成る

葛切りどっせへえおこしやす

旅鞆大麻の包みひそませて

けふの下着は黒で揃へぬ

凍て月にぼろぼろの過去探り合ひ

徒歩で通へる駅までの距離

Uターン青年の意気村おこし

巢立ちの鮒を釣りし思ひ出

花の下絵筆をとれば人の佇つ

笛であつめる野遊びの子等

翁 子

淑子

久美子

郁子

健悟

ますみ

文子

梧

郁

美

郁

文

み

同

郁

美

文

美

淑

梧

鷹一つ見付てうれしいらご崎

翁

脇送り二十韻の捌きのお知らせを受けた時、頭の中にすぐ浮び上ったのが掲出の句であった。他にこの句を発句に用いられた卓もあり、披講の折それぞれの展開に捌と連衆の呼吸のよさを感じとる事が出来た。我々皂角子の卓の連衆はみな経験豊かな達人な方で、式目表片手に四苦八苦している不勉強な捌きを助けて座を盛り上げて下さった事に心より感謝して居ります。

この巻を自解してみると、表四句と裏は淡々と進行し、捌きの保守的な性格が災してか、何かこの気分が続きそうに困ったナと思っていたところ、名残の表に入り恋の句あたりで一転破の段に入る事が出来、名残り裏は一呼吸という所です。突出して面白い句が揃ったという巻ではありませんが落着いた雰囲気のある作品だと思っております。又すこし単調になったのはカタカナの句が非常に少なくそれが場面の転換を妨げたのではないかと思う次第でこれは捌きの力量不足と痛感して居ります。連句は作品の出来はもとより、一卷を巻き終るまでの連衆との座の盛り上りも加味され、一座の心が通じ合い初対面の方とでも旧知のごとく打ちとけられるすばらしい文学であると折々感じ入り、この道の仲間に加はれた事をうれしく思っております。

連衆の皆様有難度うございました。

脇起り寒 菊

捌・文 蒲原 志げ子

寒菊や粉糠のかかる白の端

脚立たてかけ塞ぐ北窓

波頭とがりし橋を渡りきて

スキップ上手保育園の児

歌でいふお盆の様な円い月

虫の音聞きにさそふ暗闇

この度は紅葉狩らずに男狩り

松井欲しいと長島がいふ

神仏猫も杓子もおすがりし

分譲宅地一步一変

缶ビールぐつと飲み干しました愚痴る

妖精の夢を月の短夜

ほどかれてはらりと乳房隠す髪

どうして泣くの犬のをとこが

壬申の乱となりたる佐川便

等級降る勲章の沙汰

しみじみと来し方偲ぶ田舎蕎麦

亀鳴く声に合はす竹笛

高樓の花に漢俳付け合ひぬ

母の灯せる雛の雪洞

翁 志げ子

篤子

和子

隆秀

よしえ

篤

和

秀

和

哲

和

篤

志

秀

え

秀

え

秀

え

え

秋晴れの一日、時雨忌の数珠玉のお席にてお捌きをさせて頂きました事、厚く御礼申し上げます。

これで終れば良ろしう御座居ましたのに、一筆書けとの仰せ、仕方ございません、紙面の裏に隠された、恥しい嘆きでもお聞き下さいませ。

御連衆のお顔ぶれを拝見致しまして、真青。然し落着いて考えてみれば、私が居眠りしていても立派な一卷が出来上るのは確実。無い袖は振れませぬ、ケセラセラ。

一寸恰好も付けて、と
「この辺り場の句で如何でしょう」と云うより早く出揃う場の句。間の悪さ。見られて無いと思つた手元にお隣の声

「その字、この方が良いのでは」
「そうですね」成程成程。で真赤。
「この字は二、三句前にございますが」私、返って来る句が前より素晴らしい摩訶不思議。

成程成程。花の座に漢俳の文字。ハテ？
「これはね……」成程成程。
「今度ゆっくりと、教えて下さいね」と私。

ベテランの家庭教師五人に囲まれた、出来の悪い子供の心境、誠に良く解りました。猿にも出来る反省。お恥しい事でございます。御連衆の皆々様、お許し下さいませ。

脇起り鷹 一つ

捌・文 雑 賀 遊

猫衰時雨忌の捌きを仰せつかり、どうぞ楽しく巻き上げられますよう願ひ乍ら出掛ける。

私の席は「ひよんの実」連衆は四人。

鷹一つ見付てうれしいらご崎 翁

を立句に選び、脇を捌きが付けた。

薄墨色に冬浅き海

第三はピアノソナタで、場面ががらりと変り、第四のクッキーで更にモダンになる。

表が終り、下戸揃いで形ばかりの乾杯。

第五は並木の月。これで外へ出た。並木の先に無人駅。

列車を待ち乍らか、露霜の駅舎で新走りを汲み交すふたり。あら、焼ぼっくいだったの?! これに傑作が付いた。

報道陣だまして逃げるニューヨーク

聖子? 慶子? さんま? といっとき座が湧いた。

広い地域では医者も飛行機とか。熱帯魚で夏になり、夏

書で鮮やかに場面転換。次は時局。永田町の騒ぎには国中

ヤダモン。それから恋に移った。ヤダモンとそっぽをむか

れば、尚一層焦がれる恋の切なさ。成就したものの、今

は夢になった十六句目。四足をどうぞ——との催促に、早

速ハスキー犬が出た。

続いてスポーツとしてのジョギングが。そして花の八幡

様で神祇が。それから子供の明るい挙句で満尾。願った通

りの楽しい座であった。

鷹一つ見付てうれしいらご崎

薄墨色に冬浅き海

巧みにもピアノソナタを弾くならん

ミルクたっぷり母のクッキー

月さやか並木の影のくつきりと

無人駅舎は露霜を置き

新走りさしつさされつ手が触れて

焼けぼっくいひのちよっとくすぶり

報道陣だまして逃げるニューヨーク

フライングドクターいつもせはしく

熱帯魚長き尾鰭をひるがへす

夏書の筆を休めれば月

ドン辞めてドタバタ劇のきりもなし

NHKの漫画「ヤダモン」

逢ひそめし時からずっと恋焦れ

彼の体臭夢のまにまに

吠え立てるハスキー犬に石礫

若芝の土堤ジョギングで行く

花吹雪く八幡様の大鳥居

子の遊ぶ声透る春屋

津 恵 津 恵 り ズ り ズ り 遊 津 り ズ 恵 ズ 美 津 智 遊 翁

脇起り年の暮

捌・文 八角 澄子

盗人にあふた夜もあり年の暮
 根深ばかりが残る厨辺
 三毛猫の赤き首輪を結びやりて
 かくれんぼの子築山のかげ
 望の月のぼりきつたる清洲橋
 師弟の仲で新酒酌み合ふ
 そぞろ寒証扱の写真見せらるる
 野原に残る謎のサークル
 道祖神大きな鼻の少し削げ
 古美術商の爺の饒舌
 政治家も孫太郎虫孫に買ひ
 金波踏み替へサーフィンの月
 ナナハンの快調音のルート1
 好き好き好きで義姉がだいすき
 父親の名前の云へぬ嬰をもうけ
 何時かのさばるハッカーの怪
 故郷に糸を括りて住みつづく
 常節すこし盛りつける志野
 校倉にかかれる花の枝垂れつつ
 棚田うららに畦を来る人

翁 澄子 清子 啓世 正江 庸子

庸子 清子 啓世 正江 庸子 凡子 同凡 清江 清江 庸世 庸世 凡江 庸世 庸世 庸清 庸清 庸清

盗人にあふた夜もあり年の暮 翁
 何を発句とするか、迷った末、まだ知らなかった句の中より選んだ。七部集によると、「出羽国圖司呂丸が京にのぼるとて」云々の詞書があり、芭蕉が故人となった呂丸を悼む気持が深く底に流れてゐる句である事を知った。句はをかしみ、俳味が横溢している。しみじみと深い人間芭蕉の深い心を垣間見る思いがした。脇は泥棒にすっかり持つてゆかれた厨の様を付けた。第三は猫養会には珍しく三句目の猫、清子さん作。四句目啓世さん可愛らしく然も庭のたたずまいが出てゐる。ウラ五句目くつきりと満月、橋が出てこれからの恋の転回を促してゐる。正江さん。六句目、新人の久保田庸子さんは苦吟なさつてゐるかに見えたがすこい句にびっくり。七句目、中川凡さん雑談の中からのヒントで無事一巡、続けて英国で発見された謎のサークルをお付けになりぐっと新しくなった。後はとんとん進み、名残の恋句二句は句調よく楽しくそしてはっとさせられる。義姉はおおらかそのもの、しがみ付いてゐるのが義弟だとすると、まことをかしい。名残の裏はベテラン各位の御助言の飛び交ふ中で、はじめの鯛を常節にとり変へて志野の鉢に盛り、格調高く校倉にかかる枝垂の花を出された。ともかくにも終点にゴールインしての感想は「連衆の皆様有難うございました。」

脇起り 雪ちるや

捌・文 百 武 冬 乃

雪ちるや榎屋の薄の刈残し

柚のつづらを伝ふ笹鳴

カタログ誌好みあれこれ語りぬて

じゃんけんぼんのちよきばかり出る

美術館高窓細くのぞく月

コスモス揺るる駅に彼待つ

うそ寒の背広ふはりと掛けてくれ

笹にいっぱい銭洗ふ池

OA機入れて商談多端なり

使ふ場もなき拳法の技

漁労長酒の肴に冲膾

月影涼しセレベスの海

ジパンングに夢はふくらむコロンブス

目覚めの珈琲僕と飲まうよ

高野我慢の共寝五十年

猫板の猫あくびしてゐる

大学生手話通訳のボランティア

弥生狂言伯母は欠かさず

花便り閑中忙と書き添へて

黄蝶憩へるつくばひの上

翁 冬 利 雅 淳 光

乃 子 代 子 子 子 代 子 利 利 代 利 利 淳 利 光 乃

ひとつの言葉が心の中に呼び起す連想や感興の量はどれ程のものになるのでしょうか。例えば「雪」という言葉の場合、全くの個人的経験の他に恐らく古代からの文学による蓄積が相当量ある筈で、私達は無意識の内にそういう文学的伝統に浸された存在なのだと思います。付句を案ずるとは、これらの情報を選択し一行の詩として前句を継ぐ仕事ですが、この時頭の中を駆け巡るインパルスについても私は考えます。付句を案ずるのを「スリリング」と書かれた文を覚えていますが、前句に対してぱっと閃くものを掴むその一瞬をそう表現なさったのでしょうか。その時に働くインパルスの速さと強さ。さぞかしと思うのです。私もいつかそれを持つ事ができたらと身の程知らずにも夢見てしまいます。さてそんな私も「連衆はベテラン揃いですから大丈夫。」とのお奨めで捌をさせて戴きました。本当にインパルス充分で流石の御投句ばかり。月の座も恋の句作りも滞りなく、ナオで目論んだ俳味も出せたつもり。とも角時間内にまとめる事ができました。ベテランの連衆をお迎えての捌の心得は、式目への配慮もさる事ながら、座の雰囲気心地よく盛り上げる過不足なき話題の提供、そうして連衆のお身の内の感興を活潑にし、座の内の詩心の交流をなめらかにする糸口となるべきかと思いました。もとよりこれもまた私には遠い夢でしかないようではあります。

脇起り鷹 一 つ

捌・文 山口 みづえ

鷹一つ見付てうれしいらご崎

干綱からくゆるる小春日

御絵描の子等のおしやべりきりもなし

取分けてゐるスナックの菓子

いざよひの月昇り来るビルの肩

椽の実拾ひ彼の人を待つ

爽かに熱愛宣言したばかり

自ら降りし派閥会長

フィレンツェの聖母の像に立ちすくみ

カンツォーネのひびくバリトン

お絞りで足の裏拭くひとり者

最中つまみつ呷る焼酎

やな奴と思ひながらも入れあげ

おまへやっぱり小野の小町よ

老い猫の凍月浴びて怪僧に

無重力中鯉の実験

水垢離に打たるる度に生氣満つ

ホールインワン乗りし春風

連れ立ちて襲名披露花衣

白磁の壺に垂るる藤房

翁

みづゑ

好敏

弘子

良子

千雪

良

敏

同

ゑ

雪

弘

雪

ゑ

弘

敏

良

雪

良

弘

昨夜の雨の名残が未だしつとりと感じられる芭蕉記念館で、第十二回芭蕉忌正式俳諧興行は行われました。

回を重ねられ、それぞれの役も堂に入り正式俳諧興行は無事見事に終了、ついで定例の二十韻が張行されました。

時雨忌に因み「鷹一つ」の芭蕉の句を選び、脇起りと致しました。素晴らしい発句に対して脇は平凡な風景句とし、

表四から、五、六とスムーズに一巡しました。次の七の処で「熱愛宣言」などと若々しい恋の句が出るに及び、唯一

人の男性である好敏さんが「六十を過ぎるともう男じゃない」と誰かに言われたなんて、おとぼけの中性宣言をし乍

ら次第にエンジンがかかって来ました。そこで派閥会長を降りたと思うと、いきなりフィレンツェへ飛んだり縦横の

活躍、付句はぽつぽつと出るし、考えあぐんでいる人には、何かと暗示を与えて誘い水をかけると言う有様、それかあ

らぬか、女性の方も次第にトーンが上って来て、何ともユーモラスなひとり者の生熊から、奇矯な酒吞が登場、深間

な恋の山場へと、一気に展開しました。その後は化猫から無重力ホールインワン迄飛び出し、全く中性宣言の魔術に

かかり、出来た一巻だったと思います。

脇起り 初時 雨

初時雨初の字を我時雨哉

爐の傍らに硯短冊

ケープルカー溪谷を越え昇るらん

喚声あげてはしゃぐ子供ら

新月の万聖節に猫拾ふ

誰か呼んでる裏の薄野

あばた顔赤らめてゐる秋の蚊帳

一プラス一 三になるとき

お家芸根回し談合閣献金

上手に渡る癖の外側

ミューンヘンの蓋つきマグでビール酌む

頭のうへの蜘蛛の巣に月

たぶらかし世界を馳せる宗派あり

ただ者でない彼の眼差し

フォアグラのソテイとろりとディープキス

高血圧を怖れ検診

あれも夢これも又夢七十年

のどかに醬油醸されてゐる

内海の汽笛もはるか花の寺

風車売りたどる細道

捌・文 山崎 一 恵

第十二回俳諧芭蕉忌二十韻興行の捌の一人として、私の番がまわってまいりました。

芭蕉翁の句の脇起りとのことで、発句をきめなければなりません。不勉強なものでございますから、頭に浮ぶ句とてなく、芭蕉俳句集を開くと、春、秋、月ばかり目につき、冬の句をあらためて読めば、さて、何を選べばよいか。時雨忌なので、時雨の季語がはいっている句はどうかしら。それとも、深川でお作りになったのがよいかしら。などと

思いながら、「初時雨」の注を読みますと、「其翁或かたへ伴ひし比 初てなれば 初時雨初の字を我時雨哉」と挨拶せられしも……とありましたので、これを戴きまして御挨拶句と取り、脇は室内の句にいたしました。

当日は連日の雨もあがり、秋晴のよいお日和でございました。「正式俳諧興行」も執筆をなさいました、内田麻子様始め皆々様には堂々と、流れるようにお進めになり感服して拝見いたしました。

さあこれから、猫養会の二十韻興行がはじまる前のざわざわとしております時に、突然捌は、清記に小文をつけて出すように、とのお達しがございました。手紙を書くのも不得手なものでございますので、胸が重くなり、捌をいたしますす気力もなくなりましたが、一座に大先輩の杉亭様、大ベテランの千町様がいらっしやいまして、両側からお助けくださり、俳人の富美様、新進気鋭の淑代様方のお力により、無事に一卷を巻上げる事が出来ました。

「灰汁桶の」の巻鑑賞 (I)

東 明 雅

「猿蓑集」巻五には、「鶯の羽も」の巻、「市中は」の巻、「灰汁桶の」の巻、それに「梅若菜」の巻の歌仙四巻が掲載されている。この中、芭蕉の句が三句しか入っていない

「梅若菜」の巻は一応別格として、残った三巻はそれぞれすばらしい出来栄で、芭蕉俳諧の神髓を示すものとされて来た。私は「季刊連句」15号から21号に「市中は」の巻を、22号から32号までに「鶯の羽も」の巻を評釈・鑑賞して来た。それで今度は残った「灰汁桶の」の巻について評釈・鑑賞を試みようと思う。

「市中は」の巻は芭蕉・凡兆・去来の三吟、「鶯の羽も」の巻はこの三人に史邦が加わって四吟であるのに対して、「灰汁桶の」の巻では史邦の代わりに名古屋の岡田野水が加わっての四吟である。あの「冬の日」ですばらしい才能を発揮した野水が、八年後の元禄三年に、どのような姿で登場し、どのような影響をこの作品に与えるか、これも、この作品の見所の一つであろう。

まず、この作品の表六句を掲げてみよう。

灰汁桶の雫やみけりきりぐす

あぶらかすりて宵寝する秋

新畳敷ならしたる月かげに

凡兆
芭蕉
野水

ならべて嬉し十のさかづき

千代経べき物を様ぐ子日して

鶯の音にだびら雪降る

去来

蕉

兆

灰汁桶の雫やみけりきりぐす

凡兆

(現代語訳) 灰汁桶の雫がぼとりぼとりと小さな音を立てて落ちていたが、それもいつの間にか止んで夜が更け、こおろぎの音がひびいている。

(補説) 灰汁桶については、故佐藤廣幸氏が「季刊連句」三十号に、詳細な研究を発表しておられる(同号「灰汁桶の雫」)ので、それを参照していただきたいが、同氏はこの論文の中で、小宮豊隆氏以下、小島吉雄氏などの所説にもふれ、最後に、実際に灰汁桶を使用した婦人の言を取りあげ、次のように紹介しておられる。

灰汁で洗うと染めが落ちず、よく洗濯ができたものです。灰汁桶は一斗桶ほどの家にありあわせのものを使いました。その桶を台所の片隅におき、箆をその上に乗せその箆にこれもありあわせの使い古しの木綿切れを敷き、その上からお椀に水を汲み日に何度か注いでおくと、箆から下の桶の中にポトリポトリと灰の中を通ってきた雫

が滴り落ちてアクがたまります。これをお椀ですくいあげ、お湯をませ洗濯に使います。相当ぬめりのある液で、生地を痛めずよく垢が落ちました。灰はいろいろの灰を使いました。わらを焼いた灰が一番です。

次に、きりぐすは漢字で書けば蝨蝨で、緑色に褐色の斑のあるやや大型の虫、ギーッと鳴いて、間をおいてチョンと合の手を入れる。しかし、この蝨蝨は夏の虫で、秋深くなると居なくなってしまう。

これに対して、平安時代からきりぎりすと呼ばれ、歌にも詠まれたのは、現在でいう蟋蟀せうせうのことであり、蟋蟀をきりぎりすというならわしは江戸時代の末期まで残っている。古い俳句を見ても

むざんやな甲の下のきりぐす

白髪ぬく枕の下やきりぐす

猪の床にも入るやきりぐす

などは、すべて実は蟋蟀を詠んだ句であろう。

蟋蟀は秋の初めに生まれて、寒を得れば鳴くと言われている（和漢三才図会）通り、夜長・夜寒が蟋蟀の本意であろう。

「付合考」が「灰汁桶は背戸うら口の軒下塵塚などの傍に有事なべてのさま也。秋のすへ、洗ひ物の用意にとて、古き桶取出して灰たるゝいかきに、藁灰の雫の落たる音やみたるに、つゝれさせと啼虫の音に、針業のいとまなきさまざまで思ひやられて哀なり」

と言っているのは、この句の真情を理解したというべきで

あろう。つゞれさせとは蟋蟀の一種に「つゞれさせこおろぎ」というのがあって、夜寒のころ、人家に入って、リー・リーと鳴くのを、「肩させ、裾させ」と鳴くというが、つゞれは破れた衣、その肩や裾の破れを縫い繕ろえと鳴くというのであり、いかにも、灰汁桶のある土間あたりにふさわしい虫である。

灰汁桶あかじけの雫やみけりきりぐす

あぶらかすりて宵寝する秋

凡兆
芭蕉

（現代語訳）滴りおちていた灰汁桶の雫の音もいつか止み、蟋蟀の音が聞こえる夜長のころ、油が勿体ないので、灯も点さず宵の中から寝ることである。

（付心・付味）付句は人情自の句、前句は人情なし（場）の句であるから、いわゆる起情の句である。付味としては、「灰汁桶」と「あぶらかすりて」が、何れもともに庶民、それもあまり豊かでない階層の生活の実体に即した「位」の付けである。また、前句のわび・さび、静寂・寂寥の感は、付句にも移っている。

（補説）かすりて——「かする」という他動詞四段活用動詞は、①通りすぎるとき軽くふれる。②軽くその事にふれる。③上前をはねる。儉約する。④中に入れたものがすくなくなつて、取り出す時、容器の底に軽くふれる、などの意味がある。

・この句の場合、④の意味に取って、油壺にある油をかすつても油が足りないの、そのまま宵寝をしよう意と

解することも出来るけれども、むしろ③の「儉約する」、即ち、「惜しみ・節約する」の意に取る方が、むしろ自然ではあるまいか。油が乏しいことは分かっているわけであるから、別に油壺をかする必要はない。別に何もするあてもない場合は、燈を点すことは無駄であり、不経済と考えられた。江戸時代は燈油は非常に貴重であった。幸田露伴は「油を惜しむではあまりに卑しき情なり」（評釈）というけれども、それは江戸時代の庶民感情を知らぬ言であり、現代から見ると卑しいと思われる庶民の感情と実態を生々と描くことによって、芭蕉はわび・さび・しおりを写し出したのである。

あぶらかすりて宵寝する秋

新畳敷ならしたる月かげに

芭蕉
野水

（現代語訳）新築の家、新しい畳をしきつめた座敷に月が射しこんでいる。その中で行燈の灯を消して宵寝をするのである。

（付心・付味）前句の宵寝する場所を示す其場の付け。「新畳敷ならしたる」というのに薄い人情が見られるが、この句自身はやはり人情なし（場）の句と取るべきであろう。

付味としては、前句の「宵寝する秋」に見られる伸びやかな気分が、新築の家、新しい畳に月光の射す清々しい気分とよく調和している。

（転じ）第三は転じが最も大切である。この句、発句の

貧しい家の描写から、余裕ある人の住居に転じ、気分も従ってさび・わびの境地から、裕福な快気分に大きく転じている。発句も第三も、ともに人情なし（場）の句で、場の句の打越であるが、それぞれの場の状態・気分到这里だけ変化があれば、十分に転じ得ていると言って差支えないであろう。

（補説）新畳、これは青畳と異なり、表が新しいばかりでなく、中の床までも新しい畳である。だから、「猿蓑さがし」では、「前の場を新宅と見出して、新世帯の若夫婦などの底意もあるべくや……」と言っているが、そう解すると恋句になり、表六句の禁忌にふれる。また、「古集之弁」に、「移徒まへの家守か、あるは野寺の住僧などいふべくもやうならん」と言っている。新築の家に、主人らが移らぬ前に、老実な男が遣わされて番をしているというが、これは気分としては発句からの変化、転じがすくなく、野寺の住僧と見るにいたっては、やはり第三で嫌う釈教の句となってしまう。麦水の「貞享正風句解伝書」は、野水のこの句は、芭蕉の大津義仲寺内の無名庵がこのころ完成した、その挨拶の句であろうと言っている。これはこの句の作られた動機を説明する一つの手懸りになるであろう。しかし、第三は挨拶の意がなければならぬということはない。もう一つ、発句が秋の場合、脇か第三で月を出すのが常道である。この巻は脇に「宵寝する秋」という夜体が出ているから、第三には必ず月を出すべきで、それをはずしたら、この巻は素秋になる可能性があった。この点、野水は

「冬の日」以来のベテランで、ちゃんとよい月を出している。前句の灯火もない闇黒に対して、新畳の上に照る月影は明るく清らかである。流石だと言わざるを得ない。

岡田野水は貞享元年の「冬の日」以来の仲とさきに述べたが、貞享元年から、この元禄三年までの間、全く疎遠であったわけではない。

貞享四年には「笈の小文」の旅に出た芭蕉を、同じ「冬の日」の連衆の一人である山本荷兮とともに鳴海の知足亭に訪ね、また、元禄二年春、江戸に下って「おくのほそ道」の旅に出る前の芭蕉を深川に訪ねている。また、翌三年四月上旬、近江の国分山の幻住庵に入った芭蕉を訪ねた。そして、同年の八、九月頃にこの「灰汁桶の」の巻は巻かれているのであるから、野水は四月から引続き京津地方に滞在したか、あるいは、この頃彼は頻繁に上落したのか、どちらかであろうが、ともかく、「冬の日」以来の親交は続いていたのである。その後、元禄四、五年ごろから、名古屋の連衆と芭蕉の間に、一種疎隔が起ったことがあったらしく、正徳五年刊の「歴代滑稽伝」(許六)には、「路通・荷兮・野水・越人・木因等は勘当の門人也」と書かれている。「猿蓑」以後の芭蕉の変風に古い門人たちが付いて行けなくなつたのであろうと言われているだけに、野水にしても、この「灰汁桶の」の巻における一座は、彼が師の芭蕉と隔意なく付合を楽しむことの出来た最後の機会であつたと思われる。

二十韻 雁渡し

東明雅捌

実朝の伊豆の大海雁渡し

残月むなし浜のあしあと

菊枕ピアノソナタに聴き入りて

レシビ通りに作るティラミス

百羅漢誰かに似たる顔もあり

唇赤い童貞が好き

すれ違ひ年甲斐もなき投キッス

観光バスはロンドンの町

探偵は冬霧の中さていづこ

雪の廃屋電話鳴りつぐ

ころがした夢のバブルもはじけたる

ま、飲みましょよ何はともあれ

銀河系宇宙無数にあるといふ

踊り疲れる巴里祭の月

恋ひとつ落せば拾ふ旅の宿

ママ放つといて乳房ふくらむ

生き死にを振りかへりつつ庭を掃く

切れ風の舞ふまっ青な空

春さまざまの石を踏みたり

平成四年七月八日 首尾

於 熱海・石亭

(「婦人画報」十月号に記事あり)

東明雅

長尾未実

小林好晴

塩田円翁

下重曉女

高橋金魚

翁

曉

実

晴

同

実

晴

翁

曉

魚

翁

同

実

正江

秋元

馬追

付勝練習二十韻

東明雅

切	締	句	投
日	20	月	1

脇起り

立句 ふるさとや馬追鳴ける風の中

脇句

治定 撫子残る月代の道

佳作1 かまどの煙包みゆく月

佳作2 月影千々にくだく川波

3 茅葺屋根にかかる織月

4 秋刀魚を焼いて仰ぐ月影

5 雲流れ行く望の月影

6 木犀の香の誘ふ夕月

7 水頭の脛に鱧子の月

8 竹伐る山の端に登る月

9 芋煮の会の月山の月

10 毬藻祭の人を照らす月影

11 鱈酒を酌む中に出る月

12 柳散りしく山蔭の径

13 翁媪と葛の花玉

14

秋桜子

達子

千雪

淳遊

子

※リつけならば海と鯛、川と鮎を出せるように、発句に風があっても脇に月は出せるのであり、発句に秋の気象もしくは天象の語があつたら、月はスリつけて脇に出す外はない。尤も、歌仙ならば秋句は五句まで続けることが出来るから、五句目で月を出す手もあるうが、二十韻では秋五句というのは、すこし多すぎて、一巻の平衡を欠くおそれがある。だから、この発句に対しては、スリつけて月を出さなければ、第三では天象・気象の打越となるから、結局、月の句は出せない。素秋となるのである。治定の句の外、十二人の方がこのことに気づかれて、脇で月を出された。

ところで、発句の季語「馬追」は初秋である。だから脇も当然初秋の月、もしくは三秋の月を出すべきであろう。はつきり初秋の月を出されたのは⑩であるが、これは墓参、釈教の句であるから、失格である。その外、三秋の月を出された方が治定の句を入れて僅か四人であったのは淋しかった。治定の句の撫子は夏の季語となっている季寄せもあるが、昔から秋の七草の一つに数えられ、秋、それも初秋の感じが強い。前句の気分にぴったりであるので、敢てこの句を治定した。①はかまどの煙にいかにも故郷を懐しむ感情がこもっている。②もなかなか詩的であるし、③は茅葺屋根と馬追がよくマッチしている。⑤の望、⑧の竹伐る、⑩の毬藻祭はそれぞれ仲秋であり、ことに⑩は神祇の句でもあるので、脇には採用できなかつた。④の秋刀魚、⑥の木犀、⑦の鱧子、⑨芋煮の会、はそれぞれ晩秋。仲秋位の月ならば発句の馬追に対して付味もまあまあであるが、晩

- 15 美味いおやきの中は秋茄子
 16 もろこし乾く庇深々
 17 まだ山の端に残る秋の陽
 18 櫛の実籠に土間の片隅
 19 歩も軽やかに後の藪入
 20 澄める噴井に浸す鍋釜
 21 無人の駅に揺るるコスモス
 22 二学期はじまり生徒また減る

脇句を付ける時、考えなければならぬ点を列举すると、
 ①発句の挨拶を受けて、これに答えるように、発句の余意・余情で付ける。

②発句と同季、発句に三月に渡るものが出たら、脇で当季を決める。

③脇は発句と同時・同場が原則である。また発句に神祇・釈教などが出たら、これに応じる。

④留めは韻字留めがよいとされるが拘泥しない。

以上は、応募された方が一応考慮されたところであろう。但し、この発句は秋であり、その中に「風の中」という気象の語が入っているから、さらに月の出し方が問題となつて来る。尤も風は気象であり、月は天象であるから直接関係ないと考えられる人もあろうが、ともに空に関係あるものとして、たとえば海や川の打越に、鯛や鮎を出すのを憚かるのと同じであろう。

しかし、打越に海と鯛、川と鮎では困るけれども、ス※

秋の句は、はつきり何か異和感があるし、その上、⑨の月山は地名で、これも表四句の中には出せない。⑫の鱧酒は三冬の季語である。⑬柳散るは仲秋、⑭の葛の花は初秋でよいけれども翁媪は老体で述べにくく。⑮秋茄子は三秋で、発句とも付味がよい。「美味いおやきの秋茄子の月」、以下、すべて月を入れて一直する。⑯「もろこし乾く軒照らす月」⑰「まだ山の端を出でかぬる月」⑱「櫛の実籠に土間の月影」⑲「月も明るき後の藪入」⑳「澄める噴井の月に鍋釜」㉑「無人の駅の月にコスモス」㉒「二学期はじまり生徒減る月」⑮・㉒のような月の出し方を「投げ入れの月」と言う。こんな方法を覚えておかれると便利であろう。

さて、次は第三である。第三の要点を列举すると、

①第三は転じが最も肝腎である。発句・脇が人情なし。

田舎めいた風景、ともに家の外の景であるから、それが第三まで続かぬよう変化をはかる事が第一である。

②留め方、に、て、にて、らん、もなし、などで留める。

③第三は丈高く作る。

その他の注意として、この巻、発句初秋、脇三秋であるから、第三は三秋・初秋・仲秋・晩秋、どの季語でも使えないことはないけれども、初秋・三秋・初秋という形はなるべくならば取らぬ方がよい。

人情は自・他・自他半何でもよく、表四句の中であるから、神祇・釈教・恋・無常・述懐・懐旧・地名・人名などは避けるよう。

第四回全国連句新庄大会

平成四年九月十八日(金)・十九日(土)
山形県新庄市／新庄市民プラザ

九月十八日、東明雅先生御夫妻とも猫藁勢十一名は、第四回全国連句新庄大会に参加致しました。七月に開通した、山形新幹線「つばさ」に乗るのも楽しみの一つ、乗れば忽ち立句が出て、付廻しが始まるのが、猫藁の例、早速季寄せや小短冊を取り出し忙しいことです。新幹線はさすがで、今迄より一時間近く早く山形へ、五、六分の乗換え時間に米沢牛のお弁当をと、買いに走ったり、新庄行きも四回目となると、手なれたものです。「こまくさ」で一路新庄へ、折から早稲刈りの始った庄内平野を、ひた走り昼過ぎ到着。

会場の市民プラザでは、北陽社の方々始め旧知の方の暖い出迎えを受けました。定刻より笹先生、高橋市長の挨拶、半歌仙募吟の表彰があり、猫藁からは下鉢清子さんの「夏立つ」の巻が受賞なさいました。続いて実作に入り、連衆七五名、十三席で行われました。それぞれの席には、心づくしの秋の草が活けられ他流試合に緊張気味の心をほぐしてくれました。始めて一座する

方々とも、そこは同じ連句で結ばれた者同士、すぐ笑い声も出て和かに、定刻までに各席とも巻き上りました。その後バスで今夜の宿、新装なった国民年金保養センター「もがみ」へ移動、懇親会となりました。後で伺った所によりますと、この場所を確保するのに、市役所の方が泊り込みで申込みをして下さった由、連句大会にかけるとお聞きとなりました。翌日は朝から半日の史蹟廻り、封人の家、山刀伐峠、清風資料館、養泉寺等、よいお日和でゆっくり見物させて頂きました。昼食後解散となり、東京へ帰られる先生方とお別れし、中島啓世、内田麻子、五味蓉子、上月淳子の四人は北陽社の熊谷様のお奨めで、早稲田の黄に実る道を羽根沢温泉へと向いました。蛙川村にお住いの熊谷喜楽様、荒木清玉様、荒木宝章様のお三人が一緒にいらして下さい、早速喜楽様のお引きで半歌仙が始まり

ました。お夕食には蛙川でとれた鮎、珍しい通草の天ぷら等も出て、それがすぐ付句になったりと楽しく巻き上げよい旅の記念となりました。喜楽様は民謡もお上手で、新庄節等いくつか波い喉を聞かせて下さいました。皆でおねだりして仕上ったばかりの半歌仙で、北陽社流の吟声を披露して頂きました。翌朝は同じく北陽社の内田素舟様が迎えに来て下さり、喜楽様の新築なったばかりの立派なお宅へ伺いました。喜楽様は昨年金婚、喜寿、新築とお祝い事が重なりお祝いの歌仙を北陽社の方々が巻かれたのが額装され、お座敷に掛っているのを拝見させて頂き、古式にのっとった格調あるお作品に一同感心致しました。御家族で暖くおもてなし下さって陸奥の人情にふれた思いでした。名産の「なめこ」をお土産に頂戴し、「来年は五周年で新しい趣向をよりより考えていますから、きつとまた来て下さいよ」とのお言葉を胸に、帰途に着きました。

文・上月淳子

面影爽さやし

豊田好敏 捌

ふるさとの面影爽やし最上かな 豊田 好敏
 天に続かんほどの稔り田 名古 則子
 床を敷く窓に二十日の月見えて 阿部 一笠
 後ろボタンが外れにくいウの 月山 次壹
 托鉢ウの僧のわらぢは雪まみれ 小川 庭水
 山を揺るがず獵銃ウの音 笠
 抱きやうの夫に似たるが恐ろしく 子
 白髪頭を染めしこの頃 笠
 国会の政治改革はかどらず 水
 六歌仙ウてふみちのくの酒 壹
 軒先ウの燕の子等の飛び立ちて 水
 鯨も鯉も実験とされ 壹
 厨房の修業にすべて捧げたり 敏
 吐く息白く追ひつきし彼 笠
 寒月も愛のリズムに踊りだす 壹
 満塁一打首位の逆転 子
 時は今敵の居ります本能寺 笠
 野良でははばる草餅の味 水
 花前線春の悦び分かちつつ 子
 蝶のたはむる瓜坊の縞 壹

定家忌

内田麻子 捌

定家忌や鄙の宿りの萩と月 内田 麻子
 琴連弾に酌む今年酒 土屋 實郎
 渡船場は赤きとんぼの群れてゐて 松村 あや
 明日の天気を下駄で占ふ 富沢 久子
 へたな字も隠すワープロ新時代 八戸 啓次郎
 プールの少女金に輝き 伊藤 武雄
 するするとどこまで伸びる瓜の蔓 實
 足ぶみ長き政治改革 啓
 胸板の厚き鉦夫の巻たばこ や
 ポリビア移民流れ者同志 實
 愛のキス三世達の舞踏会 久
 裾の飾りにじゃれる黒猫 や
 還らざる北の島々月冴ゆる 啓
 髭の宮司もパパと呼ばれて 麻
 裏表知らずに生きて喜寿となり 雄
 郷土自慢の菜飯青饅 啓
 肩車ねだる子かつぎ花の道 久
 水族館にごんずいの玉 實

秋色の最上

中島啓世 捌

秋色の最上を恋ひて今年又 中島 啓世
 峯を離れて昇る名月 大川与志見
 新酒酌む自慢の面を取り出して 杉内 徒司
 青罇焼に走り駒描く 山田 史子
 孫に縫ふこけし模様ウの浴衣裁つ 小島 信子
 パソコン連句で明くる短夜 淺井 園子
 宮島の汐に浮いたる大鳥居 見
 舳ひたゆたふ恋の破れ舟 司
 暁の鶏にねぎめて身繕ひ 信
 廃車の上に廃車積みあげ 史
 無重力宇宙実験成功し 信
 ダイヤ乱れる今朝の豪雪 見
 音冴ゆる大竹藪に昼の月 丁
 岩波文庫星は十銭 司
 耳と目の器具を外して安眠す 史
 巣箱を覗く児等はにこにこ 丁
 さい果ての城址は花の真盛り 見
 春光溢る濠端に佇つ 世

芥文翁俳諧聞書(Ⅵ)

(承前・聞書Ⅲの歌仙雪の巻参照)

Hまた、例の私どもの歌仙についてですが、人を呑み人吐き霞む城高く、これは他でしようか。Nうん、そう他だ。H写真記念にとれとすすめる。これはだから他ですね。Nこれは城を背景にやってるでしょう。Hよくやっってますね。どこでもね。それから片言の碧い眼夫婦もてあまし、ウフフ、それで、Nすすめられる、これが何だ、外人だね。何をどういうふうな、Hそすとこれも他ですね。Nええ、そう他もてあましましたね。これは自他半だね、Hなるほど、それから、シャネルファイブの薫りどこまでNほすと、この外人のね、外人のこれはあの薫りだね。Hそうですね。Nこういうのはマアやっぱりその何だね、前句のその人のあしらいだね。Hそれから、こんどは、百姓にして客泊める家ありて、と、そうすると、この薫りはただ、誰かが泊まって、こんな百姓家だけでも、寝具か何かの器のようなものにネ、薫りがあると、この百姓家だけと、そすと、これはやはり場、Hそ

うですね。門の流れに洗ふひともし、これもその場、エエ、自と見てもよいですね。名鐘もひびの入りしか音寒くこれは先生がおつけになったのでしたね。これは自ですね。勸化衆草鞋新しくはき、これは他ですね。大和路の空紀の路よりなほ青く、これはその場、剃り立て頭月に照らされ、これは他ですか、自他半ですか、Nこれはまあ何だね、後のつけによって、自とも他ともなるという句だね。H柿盗む子等のしぐさを可笑がり、ウン可笑がるんだから自他半でしょうね。Nおかしがりだ、これは自他半だね、これは照らされている人が子らの柿を盗むところを笑っているところだ。H村の祭の太鼓聞こゆる、これはその場、Nうん、その場の出来事だ。H強酒に酔ひしれ出れば野分めき、これは自ですね、Nエ、H黒潮のりて漁にわく浜、これは他ですね、Nエ、H繫ぎをく牛が端綱を舐り切り、これもその場、Nエ、H何の句ひか風がもてくる、これは、こんなのは、まあ、これは自、Nウン、H自みたいたいものです。これは、Nそうですね、自、何の香かい香がすると、H躬恒形の硯を花に使いそめ、これはもちろん自ですね。Nこ

れは自だ。H絹糸のごとけぶる春雨、これはその場、Nその場だ。Hこれで大体何ですが、通してみてもどうでしょう。この巻は、Nこの巻はいいね。Hア、そうですか。Nこれは相当いい巻だ。Hハアハア、Nというの、その展開がうまくいっていると、Hエ、N玉がころんるだ。見事に、そして一句一句としても、相当なつぶっこい句がね。ウン、いい巻だ。Hやっぱり何でしょうね。たとえば、伊那の方とか東京の方、松代の方、あるいは松本のこの連衆とかみな特色があるでしょうね。Nあるね。H東京の方たちの作品を、「この一路」などで読んでみますと、非常に何ですね、句と句は離れて、非常にそんなところおもしろいと思いますが、たとえばアノちょっと悪口めいた所を申しますと、何かこう、新聞のニュースをこうはさんであるような気がするところがあるんですけどね。Nあるね。そしてね。そして中には何か変わった巻を作りたいというような、わざと癖があつてね。たとえば、花の句に、「花相撲横綱四人土俵入」という句を匂いの花につけて来た。そしてその所が、おらとこの孫が、あのいつか連れて来た孫が読んで、「おじ

いちゃん。これじゃ作文だない」というから、ウン作文だ、作文だちうだ。それからね、それはあの何しろ、「横綱四人土俵人」と、それは作文に相違ない。その土俵人がまずいと、何とかそこで俳諧にしなけりやね。しなけりやいけねえと、第一ね、いけねえという事は、花相撲というけれど、それは昔の制約の本ではね、正花というものを、春の花はマア当り前で、夏の花を若葉の花、残花、のこり花というものを夏の正花、秋の正花は花相撲、花火、これが秋の正花、それから冬の正花は餅花、返り花、そういう風にそのしてあるから、花相撲と言えば、秋の正花と決めこんでいても、今の相撲はね、本場所も年に六回あって、そのあいさに巡業して歩いて、今じゃ、相撲を秋季にかりにしてもね、ま、前からの習慣上、秋季とかりにやっても、本当の相撲というものの季感はないだね。それからしてまた、花相撲という事は、それじゃ、若の花の引退相撲があつたでしょう。ああいうのが花相撲だ。そのま、最負筋の花を貰う、それからして、その時の収入の利益はその者にやると、そういうのが花相撲でね、博奕打ちがよく花会というような事をね、

花会にたれそれがいくら包んで来た、誰がいくらだというのが、博奕打ちの親分たちの花会というだ。あれは、それと同じ事だ。あれは花をあつめる目的のためやるんで、決して秋季というような事はねえ事だ。だで、もう花相撲なんてものを正花に使うという事は、今時やる事じゃねえと、おら、こういう事言つてやつたが、この巻どうしたか、あとでどういう風に直したか知らねえだが、ウン。Nそれからしてね、その四季の正花をマアこしらえてあるちうのは、巻いて行つた都合で、どうしても前句の都合で、これはまあ冬の正花にしにゃいけねえとか、秋の正花にしにゃいけねえとか、というような場合にはね使う用意で、それよりもまっ重要な事は、何だだ、古式の百韻というがあるだ。これはアノ何だだ、ウン各面に全部花出すです。H百韻だと四花七月になりますか。Nエ、何ハ、それは普通の百韻で、古式の百韻は八花七月になるです。Hハア、N各面へ、どの面にもみな花が出るです。月もどの面へも出るが、ただ古式の百韻は初めの表が十句で、名残りの裏が六句だでね、それでナウの一面だけは花だけで月は出ないだ。そだで月

が一つすくないだ。H普通は初表が八句で名残りの裏が八句、あとは十四句です。N普通の百韻はね、それで古式の百韻の場合は四季の花を付けるだ。四季の花と雑の花とね。そういう必要があるが、普通の巻じや、そういう事はねえと、それからしてね。前句へ嬢捨が出たら月を引き上げてくる。どこでも、それから吉野という前句が出たら花を引き上げると、どこでもかまわない。そういう時にもし、その吉野が冬の吉野であつたら、返り花つければよい。Hハハアなるほど、Nそういう自然に出来ることはよいが、わざわざやらつと思つて花と月を前の句で言わなるとして、それから最後へもつて行つて花相撲にして、挙句を月にして、そういう、わざわざこしらえた姿態はいけねえだ。それからまた、実に過ぎる句もよくねえ。それはその通り、御尤そのままで、作文だ、いわゆるね。ハア、そういう事をよくやるだ、ウン、こんらの句だつてね、枝豆をそへてくれたる兔の子、なんのだつて、こういうのが実際あつても実に過ぎる。Hエ、詩がないですな……。

(次号へ続く)

百韻 膝送り

醉芙蓉

花の会

平成四年八月二十四日
於・八丁堀勤労福祉会館

初折

醉芙蓉八丁堀はビルの街

鳴きははじめたる秋蟬を聞く

様々に茸もてなす月待ちて

ちよっといっぶく渡す灰皿

飾り棚詩集句集の積まれをり

伸びする猫の肢はやはらか

冬景色フルートを吹く人無心

極太毛糸セーターの子よ

聖母像ぬかづき仰ぐ日曜日

戦場へ発つ彼を送りて

路地奥の部屋に籠りしオンリーさん

五輪メダルに付きし賞金

FAXのやたらに多き宵のくち

くらげ来たぞと月の水門

夏狂言怖さ見たさの指隙間

看護疲れて逝きし幽霊

密造の酒を酌み交ひのっぺ汁

署長校長マイク取り合ひ

正江

千雪

志げ子

達子

淑子

好敏

江

雪

志

達

淑

敏

江

雪

志

達

淑

敏

裏山の動物園も寝静まり

三崎坂を降りて、伊勢辰

走り根にすべってころぶ花行脚

鯛の浜焼かぶる編み笠

二の折

小半刻春雷とまる古屋根に

自慢の壺に細き貫入

ワンレンを束ねてほぐし撫でる我

鏡よかがみ悪魔いとしき

甘き蜜むぐらの床にしたたれる

力いっばい蠅叩く婆

イタリアのくるま流れる様な線

エンブレムには王家紋章

情報を推理作家は書き留めて

躁の食欲これぞ本命

診療所慰安旅行で手薄なり

おけら詣りの火縄ぐるぐる

寒稽古帰る剣士を照らす月

故郷名水スパーで買ふ

江

雪

達

志

敏

淑

雪

江

達

志

敏

淑

雪

江

達

志

敏

淑

何もかも釘一つで暮らすわざ

死亡日時は半年も前

炎天の路上にひさぐ肉の塊

ラムダン終り運ぶ大皿

偽物と知って買ったが本物で

青い鸚哥はなにも言はない

乞はれしがマザコン亭主そぞろ寒

稲架の陰から寝とられし夫

月昇る和尚部戸開け放ち

遠山まぶし風の音聞く

銀行の危機とマスコミかしましい

持たざるものは身軽気軽よ

紅白の餅花かける太柱

毛衣を着た棟梁の顔

三の折

この辺り『わに』と名付けて鮫料理

安来会館けふは満員

選ばれてスペースシャトル星のくに

紙一重たる狂と天才

江

雪

達

志

敏

淑

雪

江

達

志

敏

雪

江

淑

志

達

敏

淑

いれこ函極小となり収まれり

親にもらひし汗の指先

田植機の具合を試す畦の道

庚申様に飴そなへあり

師と弟子の婚前旅行風呂は別

落ちぬ紅ひく君の寝化粧

ミロの絵のサイケデリック額のなか

鈴虫むくろ籠にからびぬ

月今宵文台まはす源氏香

焼き栗いかがが四つ辻の角

トカレフを受け渡しする地下酒場

野球のスコア黒板にかけ

壊れたる血圧計をはふり出し

樹水きらめく森を眺める

待つ男は『蒼き狼』騎馬の長

後宮の美姫うれひみちたり

宝塚乙女の胸に春の夢

磯巾着のゆれる岩陰

清明の月ぼんやりとのぼりゆく

年金暮らし利息下がりがて

経験も生かす術なし神そつぱ

CMに出る猫の飼ひ主

吟行会余花で名高き古き苑

円座をかるる待合の縁

名残の折

時鳥今年初めて聞きにけり

縫ひ針の錆みがきゐる時

縮緬のファッション世界を席捲す

水惑星に進む公害

廻し読む古典、科学も桃尻語

葉喰ひとて爺に焼き肉

片時雨み寺の礎石濡らしたる

はばかり言ふどれが秘めごと

土壇場で心中道行逃げ出して

外連みえみえ陳腐軽薄

『吉本』の芸人達のものすごく

菊の主と看板をかけ

又一戸減る山里の居待月

無煙グリルで秋刀魚焼きあげ

えひしれるハードロックのベイサイド

高速道路続く渋滞

生涯の保険契約群を抜き

庭に据ゑたる父の銅像

継ぎはぎの縄文の土器容よく

弥生尽には決まる転動

爛漫の花よ百韻巻き終へて

寝覚の床に匂ふオレンジ

「季刊連句」に左の方々より、御芳志をい

ただきました。有難くお礼申し上げます。

一金 一万円 佐藤和夫様

一金 一万円 斎藤孤柳様

一金 一万円 河野玄麿様

一金 二万円 鎌田正憲様

一金 五万円 猫藁会様

☆ 新刊紹介 ☆

○ 車座 歌仙集 巻一

中央線立川駅付近の連句愛好者、今宮水

壺氏、海野海砂氏を中心とした連句集団車

座の作品、歌仙二十巻を集めたもの。

洒脱で、しかも正風の域を越えぬ作風は魅

力的である。

海野海砂氏

(☎)〇四二五―二五―六九六〇

○ 興流連句会作品集

日本興業銀行出身の五人によって作られ

た興流連句会、指導者は馬場彬風氏。主宰

の田原竹無齋氏をはじめ、殆んどが大正初

年生まれの高学歴者であるだけに、今時珍

しい智性と教養がうかがわれる。歌仙二十

巻、二十韻六十巻。

田原竹無齋氏

(☎)〇三一三九四―一八九九

裸木

藤井草舎捌

野分雲

瀧川雅代捌

白露

鈴木美奈子捌

裸木の枝間にかかる白き雲

藤井 草舎

羽づくろふ檻の孔雀や野分雲

雅代

皿小鉢洗ふ指先白露かな

ふみ

冬至も近く書を読む頃

馬場 彬風

櫻の梢に覗く昼月

達子

月見の宴にはしゃぐ子供等

好敏

寝ながらに歴史の流れ考へて

千木良 果然

美術展搬入準備念入りに

遊

故郷は秋の七草さかるらん

哲

円き柱の古き建物

平野 桜丘

膝を揃へて間食待つ児ら

和代

パステル調で描くイマージュ

美奈子

人影もまばらな月の名所なり

田原 竹無齋

笑顔もて家事協力を迫らるる

和

「さぶちゃん」の興行甚句聞き納め

義夫

新酒の酔ひに誘ふセクハラ

尾向 閑堂

犬の散歩にかこつけて逢ふ

遊

抱きしめて夢に消えたる雪の精

敏

肘鉄砲紅葉且つ散る森の中

静寂を破る鳥の羽搏き

コスタデルソル真つ青な海

同

ロシアの熊は海を渡らず

凡

砂利ふんですすむ参道神寂びぬ

茶店の椅子に朋と向き合ひ

暑氣払ひ少しの酒がすぐまはり

和

手づくりのジャムを入れたるティーカップ

み

汗ぬぐひ国際貢献口説けども

夕風なぎて月上る海

剥落の風神雷神雨の中

達

体重計にしづしづと乗る

凡

宇宙から映す写真の珊瑚礁

南の果のロマンあこがれ

栄養豊富モロヘイヤ買ひ

和

マルクの金利やと下がって

義

世は移り親のことなど知らぬ顔

老人病棟どこもいっぱい

狸御殿の今宵嫁取り

達

おたんこなすがうらなりに惚れ

凡

八畳に生まれ余生は四畳半

蛙這ひくる蹲ひの下

月明りあまねく照らす枯山河

和

重力のなき船室でベッドイン

み

小波に乱れ揺れたり花の影

草餅ねだる子供かしまし

父の遺せしパイプ愛用

遊

人生茫洋魚虫鳥獣

哲

平成三年十二月十六日 首尾

於 興隆会談話室

花びらの散り込む車庫の三輪車

達

常駐の先生募る地方版

義

アルバム開きのどかなる縁

丘

お玉杓子に手足生えだす

和

楼蘭の花の命に魅せられて

奈

平成四年九月三十日

於 源心庵

花びらの散り込む車庫の三輪車

遊

卒業式にいき飲みさせ

み

平成四年九月十四日 首尾

於 洪谷連句会

花びらの散り込む車庫の三輪車

達

諸葛菜咲く丘でうたた寝

凡

於 興隆会談話室

於 源心庵

花びらの散り込む車庫の三輪車

和

卒業式にいき飲みさせ

み

於 興隆会談話室

於 源心庵

花びらの散り込む車庫の三輪車

和

卒業式にいき飲みさせ

凡

於 興隆会談話室

於 源心庵

花びらの散り込む車庫の三輪車

和

卒業式にいき飲みさせ

凡

於 興隆会談話室

於 源心庵

花びらの散り込む車庫の三輪車

和

卒業式にいき飲みさせ

凡

於 興隆会談話室

於 源心庵

花びらの散り込む車庫の三輪車

和

卒業式にいき飲みさせ

凡

連句会案内

雁帛往来

＊連句教室

日時 第一日曜日 午後一時～五時
会場 江東芭蕉記念館

江東区常盤一六―三
(電) 三六三一―二四四八

＊柏連句会

日時 第二日曜日 午後一時～五時
会場 光ヶ丘近隣センター

(南柏駅よりバス 光ヶ丘団地
マールケット下車)

＊A・C・C連句・理論と実作

日時 第二・四土曜 午前十時～十二時
会場 新宿住友ビル四十八階

朝日カルチャーセンター
(電) 三三四四―一九四二(代表)

＊猫蓑会(会員制)年四回

会場 江東芭蕉記念館
江東区常盤一六―三

(一月・四月・七月・十月 第三水曜日)
(電) 三六三一―二四四八

▽九月四日 「季刊連句」三十八号届く。
発送。

▽九月六日 深川芭蕉記念館で第一三五回
連句教室。出席十六名。

▽九月九日 柏市光ヶ丘近隣センターで、
正式俳諧總練習を行なう。

▽九月十二日 A・C・C、付方自他伝に
つき話す。

▽九月十三日 柏連句会。二十韻二卓興行。
▽九月十八日 新庄市第四回全国連句大会
へ出席。全国より七十五名、猫蓑からは

十名参加。募集作品の中、本屋良子さん、
下鉢清子さんが入選、表彰された。慶祝。
夜はもがみ町の温泉で懇親会。新庄市の

方々、北陽社の方々に厚く謝意を表する。
▽九月二十六日 A・C・C、前期總まとめ。

▽十月四日 第一三六回連句教室。出席十
九名。

▽十月十八日 柏連句会。二十韻一卓。

▽十月二十一日 第十二回俳諧芭蕉忌、第
四十三回猫蓑会を興行。正式俳諧も全員

手落ちなく、ことに執筆内田麻子さんの

落ちついた文台捌きに感心した。
▽十月二十四日 A・C・C 後期第一回
授業始まる。

▽十月二十九日 国民文化祭石川92に出席。
津幡の会場に向う。猫蓑から二十五名出

席。倉本路子さんが国民文化祭実行委員
会長賞に、八角澄子さんが、石川県実行

委員会会長賞に、百武冬乃さんが津幡町実
行委員会会長賞に輝いた。慶祝。

季刊「連句」 第三十九号
平成四年十二月一日発行

編集人 東 明 雅
発行人

季刊「連句」発行所
▽277 柏市つくしが丘二ノ二ノ一二 東方

電話 〇四七一(七五)一一九二
振替口座 東京七一五二二三三

印刷所 株式会社 岩田印刷
▽277 千葉県柏市酒井根六二六一―

電話 〇四七一(七四)〇一八三

定価 一部 五〇〇円 送共
一年 二〇〇〇円 送共

連句辞典

東明雅・杉内徒司・大畑健治編

版

三

B6判
三五二頁
三五〇〇円
必須の知識をすべて網羅！
初心者から研究者まで使える本邦初の連句辞典

本書は、用語篇、人名篇から成る。用語篇は、現在使われている用語を中心に三二四語選び、意味・用法の解説をし、「参考」欄の引用文は中・近世の諸資料から、用語がどのように記されているかを抄録。人名篇は、近代以降に活用した連句人、俳人五十四人を選び、項目末尾に代表的な連句作品を収録した。また、連句入門の手引き、連句概説、連句略史を付した。近代連句の状況を知る上で貴重なものである。

収録項目例

〈用語篇〉 挙句 会釈 一座一句 有心 打越
思いなし 表八句 懐紙 歌仙 軽み 切字
景気 五句目 差合 去 式目 四春八木

〈人名篇〉

天野雨山 伊藤松宇 上田聴秋
小林見外 下平可都三 関為山
高橋玄一郎 高浜虚子 中村俊定 野村牛耳

水原秋桜子編 二二〇〇円
俳句鑑賞辞典

貞徳・宗因から現在活躍中の俳人まで二七〇人の古典的かつ伝統的な名句一〇〇〇を収め、豊かな実作の経験を生かし句作にも役立つ

水原秋桜子編 二八〇〇円
現代俳句鑑賞辞典

結社や傾向にとらわれず現代の代表的な俳人五〇五人の代表作一四六八句を収め、公平に客観的に鑑賞した。俳句鑑賞辞典の重複なし

大後美保編 二八〇〇円
季語辞典

日本の季節にまつわる言葉やスモッグ・不快指数などまで収録し、春夏秋冬の四季に分類した。気象学者の立場から厳密に季節を分類

中村俊定監修 四五〇〇円
難解季語辞典

古典俳句に使われる季語は今日では意味や表記が難解で正しい解釈や鑑賞ができない。本書はそれらの季語二千語を収め、解説を施す

国語学大辞典 国語学会編 B5 1A000円

国語慣用句大辞典 白石大二編 A5 5A800円

国語慣用句辞典 白石大二編 B6 3B200円

国語史辞典 林巨樹他編 B6 4A800円

日本語語源辞典 堀井弁以知編 B6 1A000円

京都語辞典 井之口・堀井編 B6 1A000円

擬音語擬態語辞典 天沼 東編 B6 3B500円

隠語辞典 榎垣 実美編 B6 2A800円

近世上方語辞典 前田 勇編 A5 10000円

花柳風俗語辞典 堀井泰哲編 B6 3B200円

大正新語俗語辞典 榊島忠夫他編 B6 3A800円

難訓辞典 中山泰昌編 B5 3B000円

名乗辞典 荒木貞造編 B6 2A800円

名数数詞辞典 森 睦彦編 B6 4B500円

あいさつ語辞典 奥山益朗編 B6 1A000円

新版 ことば遊び辞典 鈴木繁三編 B6 5A800円

類語辞典 鈴木・広田編 B6 2A800円

類義語辞典 徳川・宮島編 B6 3B000円

新版 文章表現辞典 藤原与一他編 B6 4A800円
神島・村松編 B6 2A900円

東京堂出版

101東京都千代田区神田錦町3-7

電話03-3233-3741~2